
執事とメイド。時々暴走族

ゆうき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

執事とメイド。時々暴走族

【Nコード】

N6045P

【作者名】

ゆつき

【あらすじ】

かみしろけい
神代恵はとある企業の御曹司「だった。」

幼少の頃より、親から仕事のストレスに対するはけ口にされていた恵は、精神的にも肉体的にも限界に来ていた。このままでは自我が崩壊してしまうと判断した執事が、恵を守るために、一人の女性と共にこっそりと恵を逃がした。恵も、執事からの提案を聞いて、即座に実行した。後悔はなにもない。そう、小さい頃から仲が良かった妹に、何も言わないで出てきたことを除いて……。

女性の名は野崎明。のざきあかり 学生兼暴走族である。

明は、恵を逃がしてくれた執事の姪であり、執事から恵の事情を聞いていたため、快く協力をしてくれた。

恵は先ほどの事情から学校へはいけなかったため、バイトをして日々の糧を得ながら、時折明の暴走行為に参加していた。

—— 本編は、恵が明の家に転がり込んでから一年とちょっとが経過した時点から開始する ——

1話 彼は執事長（前書き）

おはこんばんちわ！

おひさしぶりですゆうきです。

東方時操劇の最新話と投稿してから既に二カ月。

東方に対する興味事態の稀薄化と、執筆に対するモチベーションのダウンから、小説に読もうのサイト事態を覗く事をしていませんでした。多忙つてもあつたんですけど・・・。

しかしまあ、ここにきてちょっとだけモチベーションが回復したので、新たに投稿してみようと思い立ったわけです。

そのうち東方時操劇の方もUPすると思いますので、これからよろしく願います。

1話 彼は執事長

執事とメイド。時々暴走族

「恵、起きて。」

どこから俺——かみしろけい神代恵を呼ぶ声が聞こえてくる。ついでに揺さぶられているらしい。

「恵、バイトの時間まであまりないわよ。起きて。」

——うるさいな。バイトなんて——

そう思い声の主に背を向けた。俺の安眠を邪魔するんじゃない。数瞬の後、背中に衝撃が走った。

「ぬぐっ!!」

息ができない。背中から伝わった衝撃は腹を突きぬけて横隔膜に多大なダメージを残して行った。

痛みに耐えきれずベッドの上を転がっていると、俺の背中にヤクザキックをぶち込んだであろう人間から三度呼ばれる。

「バイトまで時間がないわよ。起きて恵。」

「・・・」

「何よ、人がせつかく起こしてあげたつてのに。」

こいつ・・・もう少し優しく起こすことはできないのか。

「あんたの寝起きが良かったらこんなことはしないわよ。」

エスパーかお前は。

「しゃべらない分、顔に出てるのよ。」

むう、気がつかなかった。そんなにわかりやすいのか俺は。出てしまうのは仕様がな。諦めよう。さて、二度寝だ。

「させると思う？あんたが稼がないと困るのよ。」

そう言い放ち、明は俺から布団を剥ぎ取り始めた。

ああ、紹介が遅れたな。こいつは野崎明^{のさきあかり}。生物学上は女だ。

見た目は、どこにでもいるような女・・・ではない。なんていうか、こう、とてつもなく美人だ。

腰まで届くつややかな茶髪。さらさらである。整った顔立ち。顔のどのパーツを見ても非の打ち所がない。

シミひとつない肌、モデルを彷彿とさせるスラリとした肢体。見た目は完璧だ。

性格も非の打ち所がない。とても穏やかで、誰にでも分け隔てなく接する。

・・・自分の家に帰るまではな。

先ほどの素晴らしいヤクザキックを見ればわかんと思うが、手が早い。

特に俺に対しては遠慮の欠片もなく、寝起きに踵落としを食らうことなんざざらである。

前述したが、外面は非常に良い。そのため、大量のラブレターを頻繁に家に持ち帰っては焼却処分をしている。そろそろその仕事俺に回ってきそうで怖い。

・・・などと明のことを脳内で説明していたら明が近寄ってきた。

「ほら、目え覚めたならさっさと顔を洗う！ぐずぐずしないの。」

「ん。」

「・・・あんた見た見た目は良いんだから、もうちょつと喜怒哀楽を表に出しなさいよ。営業スマイルだけじゃなくてさあ。」

「ん。」

「・・・。」

今日も平和である。

明を学校に送り出した後、俺もバイト先へ向かうため、バイクの準備をする。俺の相方、GSX-R750である。

流れるような流線型のフォルム、しかし威厳を感じさせるそれは、とてつもないじゃじゃ馬だが、

乗りこなすことができれば、最速のサラブレッドへと変貌する。

いつものように漆黒のライダースーツと、これまた漆黒のヘルメットを装着し、バイト先へと向けてハンドルを捻った。

—— 15分後 ——

バイト先の裏口にバイクを留め、ヘルメットを外しながら従業員用の入り口へ向かう。

さあ、今日もお嬢様やご主人様の為にご奉仕しますか。

「おはようございます。」

いつものように挨拶を交わしながら更衣室へと入って行く。

着替えること5分、執事服に着替え、伊達メガネを装着した俺は、近くにいたメイドの格好をした従業員に声を掛ける

「すみません、シフトの時間までまだ5分あるんですが、暇なのでホールに入らせてください。」

「あつ……。は、はい！お願いします！」

メイドは顔を赤くすると、いそいそとトレイを胸に抱えると、ホールへ駆け出していた。

明に劣らず、俺も顔がいいと自覚している。加えて、この銀髪である。

生まれつき銀髪だったわけではない。長期に及ぶ親父の虐待によるショック症状で、色素が抜けてしまったせいである。

・・・と、この話はもういいだろう。さ、仕事だ。

「お帰りなさいませお嬢様。」

客が入店する度、入り口まで行き挨拶をする。

この店の従業員の95%は女。つまりメイドである。

残りの5%が男。執事なわけだが、従業員の数は男女合わせて20人しかない。

何が言いたいかと言うと、この店の従業員は俺だけなのだ。

つまり、ハーレム状態だ。しかし、この店に訪れる客の割合は、女：

男＝3：7くらいだろう。

それだけ俺目当ての客が多いということになる。

「・・・。」

客からの反応はない。はとが豆鉄砲を喰らったような顔をしている。

「お嬢様？」

「あ、えつ……。うつつ、えつと、二人なんですけど。」

「かしこまりました。二名様ですね。それではご案内します。」

俺が席へ案内すると、後ろからおずおずと着いて来る。案内をする間にも、客からはさまざまな視線が飛んでくる。幼少の頃、礼儀作法をしっかりと叩き込まれた俺にとって、これらの動作は当たり前の様にこなすことができる。・・・そんな珍しいものか？

「それでは、ごゆっくりどうぞ。」

まあ、やっぱり顔なんだろうなあ・・・。

——時間は過ぎ、午後4時——

土曜日ということもあり、店は朝から満員御礼である。午前10時からホールで忙しく動いていた俺の顔には多分疲労の色が浮かんでいるだろう。この店には指名制度があるので、体力的にも精神的にも「来る」ものがある。その時、ほかのメイドとは違うタイプのメイド服を着た女性が俺に話しかけてきた。

「お疲れ様ケイ君。あなた朝から休憩とってないじゃない。少しは休みなさい。」

声を掛けてきた女性はメイド長。つまり、店長である。

「申し訳ありません、10分程休憩してきます。」

「短すぎよ。最低でも30分は取りなさい。これは店長命令です。」

「・・・分かりました。」

店長命令なら仕方がないな。と、恵は休憩室に引っ込んだ。
30分あれば何か食えるな……。さて何を食べようか。

まかないのメニューを考えていた時、横から声がかかった。

「ねえ、ちよつといい？」

時間がないから手短にしてほしいもんだ。

「ん。」

「よかつたら一緒にご飯食べない？私も休憩時間ずれちゃって……」

とか何とか言っているが、恵が休憩に入った後、2、3人のメイドが俺の後を追う様に休憩を取ろうとしていたのを

恵は見ていた。一人しか居ない所を見ると、他のメイドは休憩に入れなかった様だ。

「いいよ。」

そういうと、メイドの顔には、笑顔というなの花がぱあっと咲き誇り、うれしそうに恵のそばに寄ってきた。

「そ、それじゃあ何食べる？私、神代君と同じのがいいな。」

「……カルボナーラ」

「うん、カルボナーラね！二人分持ってくるから神代君は座って待

「つててね！」

「ん。」

メイドが奥にひっこんだのを確認して、恵はメガネを外した。

カルボナーラができあがるまで10分はかかるだろう。そう判断し、鞆から一冊の小説を取り出した。

空腹を紛らわすための手段だろうが、この際空腹を紛らわせるのなら何でもいい。

——Side メイドA——

「えへへ・・・。」

私は今日、ついてる！　なんてったって、神代君と一緒にご飯を食べられるんだもん。

・・・カロリーのにはちよっぴりきついけど、必要経費だからしょうがないよね！

「ちよつと一花^{いちか}。」

カルボナーラをトレイにのせて休憩所に行こうとした時、不意に呼び止められた。

「なにー？私これから休憩なんだけど。」

「あれ？今休憩には神代君・・・チッ！」

忌々しげに私を見てくる知り合いのメイド。後が怖いけど、今は神代君とのご飯タイム！急がなきゃ！

——メイドA（一花）Side out——

小説を4〜5ページ読み進めた所で、カルボナーラが放つ濃厚な匂いと共に一花と呼ばれていた女の子が戻ってきた。

「お待たせ！さ、冷めない内に早く食べよ？」

「ん。」

一花は慣れた手つきで食器を並べる。ああ、いい匂いだ。忙しさで忘れていた空腹感が一気に強くなる。

「いただきます。」

「あ、うん。どうぞ、召し上がれ。」

自分で作ったわけではないだろうに……。一花からはそんな返事が返ってきた。

カチャ・・・カチャ・・・

休憩室から食器同士が当たる音だけが響いてくる。

「どう？おいしい？」

「ん。」

「よかった。足りなかったら私の分も食べちゃっていいからね。」

「・・・いい。」

「ふふつ。それじゃ、私もいただきます。」

どうやらこのカルボナーラ、本当に一花が作ったものらしい。

時折「もうちょっと卵を入れるタイミングを・・・。」とか聞こえてくる。

本人は失敗だったと思っているらしいが、普通にうまい。

料理人ならいざしらず、一般人だったら十分上手なレベル・・・だと思う。

どうやら、相当腹が減っていたらしい。あっという間に食べ終わってしまった。

「ごちそうさま。」

「はい、お粗末さまでした。ごめんね。ちょっと失敗しちゃった。」

「ん。おいしかった。」

「そ、そう？次はもっと上手に作るね。」

次があるのかよ。でもまあ、せっかく作ってもらったんだ。次は俺が作ろう。

「次は俺が作る。」

「え？」

「一花は困っていた。どうやら想定外の答えだったらしい。」

「お礼。」

「い、いいのかな。次一緒に休めるのいつになるんだろ……。」

「なんだかゴニョゴニョ呟いているが、聞き取れない。」

「嫌？」

「えっ、嫌じゃないよ！それじゃあ……次休憩時間が一緒になった時お願いね。」

「ん。分かった。」

「次の休み時間一緒にいるような人を買収しないと……。」

「また何か言ってる。聞き取れないけどさ。」

「休憩時間も終わり、上がり予定の9時まで残り2時間というところで、事件は起こった。」

「メイド喫茶で避けては通れない道、客の過剰なスキンシップである。」

「ねーいいじゃん。あがった後どうか遊びにいこうよ。」

「やめて下さい！」

「どうやら指名制度を利用してナンパに来たらしい。ナンパお断りと

入り口に書いてあるんだが・・・。

おーおー腕つかんで離さないよあれ。さて、お帰りいただきますかね。冷静に冷静にっ。

「お客様。」

「なんだ？」

やたら態度がでかい男の客二人の前に立つ。すごんでいるがぜんぜん怖くない。親父に比べればカスも同然だな。

「お客様がお望みのサービスは当店ではいたしておりません。それ以上この行為を続けるのであれば

営業妨害とみなし、然るべき対応をさせていただきますので、お引取り願います。」

「なっ・・・。」

驚いている。それもそうだろう、メイド喫茶から執事が出てきたからだ。それも男。当り一面に静寂が訪れる。

客と店員の視線を一同に集めた男達は、自分達の立場の悪さを自覚したのである。そそくさと会計を済ませて

帰っていった。常連からするといつもの光景だが、初めて来た客なら驚くだろうな。

「お疲れ様。」

後ろを振り向くと、店長がトレイにコーヒーとケーキを載せていた。これから休憩だろうか。

「お疲れ様です。ごゆっくりどうぞ。」

「ん？・・・ああ、これ？ケイ君のよ。ありがとうございます、追っ払って
くれて。」

「はぁ・・・。」

「と、いうことで。15分休憩入れてきなさい。店長命令です。」

「ん。」

おっと素が出てしまった。いかんいかん。

休憩室でコーヒーを飲みながら、ミルフィーユに舌鼓を打っていると

「あ、あの！」

声を掛けられた。

「なに？」

「あの、先程はありがとうございました。何かお礼をさせてください。」

「いいよ別に。」

そう言いながら振り返ると、ボブカットが印象的な、メガネを掛けた女の子がこっちに歩いてきた。

「私の気が済まないんです。さつきはとても怖かったから……。」

少し、手が震えているみたいだ。男嫌いなのかなこの子。なんでここで働いてるんだろう……。

「ん。じゃあ、ブッシュ・ド・ノエル。」

「え”っ。”」

さすがにそんな高いのは頼まないと踏んでいたのだろう。目が泳いでる。

「あの、すみません……。実は今月厳しくて……。」

「冗談。じゃあ、モンブラン。」

「あ、はい。すぐにお持ちしますね。」

彼女はててて……と小走りに休憩室を出て行くとする。

「ねえ。」

「あ、はい何ですか？」

「震え、止まったね。よかった。」

「あ……。」

今頃気づいたのだろう。顔を少し赤くして部屋の奥に消えていった。

そして、時計の短針が3 / 4 回転。

閉店時間となり、魔法が解け、メイド達は普通の女の子へと戻り始める。

俺も執事から一般男子に戻ろうと思って、男性用の更衣室に向かうとした時、

「ケイ君。ちょっといいかしら。」

メイド長からお声が掛かった。

「はい、なんでしょう。」

「前から思っていたのだけれど、私に対してだけそんな改まった口調じゃなくていいのよ?」

「いえ、上司ですし。」

「じゃ、店長命令!」

「……ん。」

「よろしい。」

「で……。何か用?」

「そうなんだけれど、ケイ君って明日もシフト入ってるわよね?」

「ん。」

「明日はイベントの日にしようと思っているのよ。それでケイ君に

折り入って相談があるの。」

「ん。」

「せっかくのイベントだし、楽しくしたくない？」

「ん。」

「よかった。それでね？ケイ君にはメイドさんの格好をして欲しいのよ。」

「ん。・・・ん？」

「言質は取ったわ。それじゃ、明日もよろしくねケイ君。」

「え・・・。ちょっと・・・。」

反論も碌に聞かず、店長は足早に事務所へと戻っていつてしまった。
・・・まあいつか。皆の驚く顔みたいし。

愛車に乗って15分、既に我が家と呼んでも過言では無い程馴染んでしまった明の家に着いた。

「ただいま。」

「お帰り。ご飯出来てるわよ。」

明はいつも恵が帰ってくるまで晩御飯を食べないで待っている。」

「ん。」

二人がテーブルに着くと、いただきますの合図の後、何時もどおりの食事が始まった。

「今日はどうだったの。」

「男二人。追い返した。」

「そ。」

このやり取りで自体を大体把握できるといつのだから、明もすごい。

「他には？」

「ん。・・・明日女装することになった。」

「は？」

「店長命令。」

「ケイ。」

「ん。」

「無理やりやらされた訳じゃないのね？」

「ん。イベントを盛り上げる・・・らしい。」

「そ、じゃあ何も言わないわ。」

「ん。」

「でもね、やるからには徹底的にやるわ。まずは無駄毛処理からよ！」

「ん。」

二人ともノリノリであった。

翌日、恵と明は普段よりも2時間以上早く来た。

「おはようございます。」

「おはよ・・・あら？誰かしら。」

ケイの横にいる明を見て、店長は不思議そうに恵に問いかけた。

「おはようございます。恵の従兄弟の野崎明です。ケイの化粧を手伝いに来ました。」

「女の子を連れて出勤なんて・・・すごい気合の入れようねケイ君。」

「ん。」

「無駄毛処理などは昨日済ませてありますので、後は顔と髪と服だ

けです。一緒にケイを綺麗にしましょう！」

「分かったわ。さてケイ君。時間はたっぷりあるわ。準備しましょうか。」

「ん。」

——1時間半後——

サプライズということで、皆が出勤してくる前に事務所に移動した。呼ばれたらホールに来てくれということなので、

女性の動作や仕草をを復習している。一通り終わったところで、メイド長から声が掛かった。皆の驚く顔が目には浮かぶぜ。

さあ、突撃だ。

——Side 一花——

今日も元気に働くぞー！とバイト先に向かったら、神代君を除いた全員がホールに集められていた。

なんかあるのかな？他の人達も動揺してるみたい。そりゃそうだよね。こういう場合、大抵突発的なイベントとか

開かれたことが多いから……。店長のことだから、私達にお客さんとゲームでもやらせるんだろうな。

……気持ち悪い人もいるからあんまりたくないんだけど……。なんて予想を立ててたらメイド長が事務所から出てきた。

「おはよう皆。準備中の所集まってもらってるから、手短に済ますわね。」

気づいたらみんな静かになってる……。すごいなあ、切り替え早い。

「今まで突発的に色んなイベントをやってきたけれど、今日から毎週日曜日にイベントを行うことにしたわ。

今日はその先駆けとして、神代君にお願いしたわ。ケイ君、入ってきて頂戴。」

店長の発言の後、事務所のドアが開いた。

その瞬間、皆の唾を飲み込む音が聞こえた気がする。

・・・あれが、神代、君？どこからどう見ても完全に女の子じゃない！

しかもとびつきりの美人さん！膝まで届きそうな絹の様な銀色の髪・

・・・綺麗。

お化粧品も全然いやらしくない。ナチュラルメイクでここまで綺麗になれるのって素材が良いからだよねえ。

スタイルも抜群で、まるでモデルさんみたい……。うらやましいなあ。

歩き方なんて、どこかの上流階級のお嬢様みたい。まさか、この日のために練習したとか？

そうじゃないとしたら、もともとどこかのお坊ちゃんなのかな……。

なんて考えてたら神代君の挨拶が始まった。

「おはようございます。一応、本日限りですが、この格好でお客様にご奉仕をさせていただきます。」

神代恵です。一日という短い期間ですが、どうぞ皆さんよろしくお願ひします。」

うわ……。本物のメイドさんみたい。見たことないけど。

でもなんていうか、こう、背徳感が。女装しているはずなのに、どう見ても女の子にしか見えない。

挨拶が終わるな否や、メイド長から突っ込みがはいった。

「ねえ、ケイ君。言葉遣いが丁寧なのは何時ものことだけど、たまには変えてみない？」

せっかく女装してるんだからさ。」

なんて言ってる。さすがにこれは神代君も怒るんじゃない。

「ん。何がいい？」

うええ！？やる気満々だよ神代君。これは意外だなあ。というか、この状況をどうにかして楽しもうと

してるのかもしれない。でも、いつも何考えているかわかんないからなあ……。彼。

「そうね、強気なお嬢様風味なんてどう？ケイ君なら演じられると思うのだけれど。」

「ん。」

神代くんは頷いたあと、10秒ほど考え込んだ。お嬢様キャラを自分なりに考えてるのかな？

「本日限りだけど、お世話になるわ。まったく、世話が焼ける後輩を持つと苦労するわね……。」

ああ、そうそう。私の視界の中でお客様にご迷惑をおかけしたら罰則を与えるわ。いいわね？」

・・・へ？

「返事は？」

「は、はい！」

うわ、皆すごい緊張してる！ていうかなにこのプレッシャー！？メイド長より遥かに怖いんですけどっ！！

「ん。・・・罰は嘘。何時も通りで。」

一瞬神代君が素に戻った後、皆へなへなと座り込んでしまった。・・・彼は一体、何者？

——Sideout——花——

むう、スカートって落ち着かないなあ。足がスースーする。化粧つてのもなんか気になる。唇乾いたからって舐めることできないし・・・。

始業時間まで後5分か。今日は気合入れていくかねえ。
上流階級の腕を見せてやるぜ。元、だけどな。

――営業開始5分後――

人気店だけあり、開店前から既に数人の客が並んでいた。店の中を
気にしていた客達は、開店と同時に
お目当てのメイドを指名しようと思っていたのだが……。

「お帰りなさいませご主人様。」

今まで見たことのない新人と思われるメイドが客を迎え入れた。凛
々しさと同時に憂いを帯びた黒い瞳に、
客達は次々と引き込まれていった。そして、目の次に容姿を見た客
達は、もう彼女（？）の事を
忘れることができないだろう。訪れた客、更に同じ従業員であるメ
イド達を魅了し続ける当の本人は、
視線を感じても気づかないことにした。

――元々女顔だったし、声も高いからな――

本人も、顔と声については自覚していた。子供の頃に、女物の服を
着ていた事もあった。

いくら子供とはいえ、異性の服を着ることは抵抗がある。まあ、親
の趣味だったのだが。

それにしても、エクステとは便利なものである。髪をある程度とは
いえ自在に変更できる。

便利だなあゝなどと恵は考えていたが、次々に客に指名されるため、
その辺の考えは一先ず

頭の片隅に置いておく事にした。

――そして休憩時間――

例によって店長命令が発動し、恵は40分という、本人からしたらありえない程の長い時間、休憩を取る羽目になった。
「ふう。」

「えっと……。神代君でいいんだよね？」

振り返ると、3人のメイドが恐る恐る恵に挨拶をしてきた。

「ん。」

「あ、本当だ……。綺麗だなあ。」

「ありがとう。」

「……。すごいギャップ。あの氷みたいな微笑はどこにいったの？」

「あっちのほうがいい？」

「……。恥ずかしくない？」

「別に。」

「じゃあ、休憩時間の間だけお願い。」

「ん……。わかったわ。これでいいかしら。」

「！」

態度が豹変した恵を見て、メイド達は啞然とした。妖艶な笑みを浮かべ、誘う様な声で3人のメイドに呼びかける謎の女。

メイド達の目には明らかに困惑と畏怖が浮かんでいた。

「どうしたの・・・？まさかとは思っけれど、私が怖いという訳じゃないわよね？」

「あ・・・。えっと・・・。」

メイド達に焦りの表情が浮かぶ。というよりも、恵が放つプレッシャーのせいなのだが・・・。

「・・・やめる？」

一瞬、恵が素に戻り3人のメイドに尋ねる。途端、メイド達が堰を切った様に喋り始めた。

「すごい！神代君女優になれるよ！」

「なんか、お姉さまって感じだった！」

「・・・男なんだけど。」

「あっ・・・。そうだったね。」

今頃思い出したのか、メイド達は苦い笑みを浮かべていた。

「で、どうすんの。」

「えっとね・・・今日一日それでいて下さい。」

期限延びてるし。

「ん。．．．それじゃあ、あなた。名前は？」

「三島です。三島香織。」

「そう。香織、あなたは先輩にお茶を持ってくることにできないのかしら？」

「は、はい！すぐにお持ちいたします！」

演技を分かっている、違和感ゼロのそれを見て、三島香織は、思わず自分が本業のメイドで、上流階級のお嬢様に仕えていると錯覚を起こしていた。

「お、お待ちせしました。」

「いただきわ。．．．あら、美味しいじゃない。」

「ありがとうございます。」

「ふふつ、これからも私のためにお茶を入れなさい。いいわね？」

「はいっ！」

得てして、休憩室はカオス空間となった。

—— 30分後 ——

女装をした恵の人氣があまりにも高く、客からの指名が殺到したため、メイド長は恵に休憩時間を早めに

切り上げてもらおうとおもって休憩室に赴いたのだが・・・。

「お姉様！私が入れた紅茶を飲んでみてください！」

「お姉様！・・・あ、あの！今度休みの時に一緒に買い物に行きませんか？」

「お姉様！」

「・・・。」

あまりの力オスっぷりにメイド長は固まっていた。

「はいはい、そんなにがつつかないの。・・・あら、メイド長じゃない。どうしたの？」

「えっと・・・。ケイ君よね。」

「そうよ。」

あまりの豹変っぷりに、困惑が止まらない。

「お客様の指名がケイ君に殺到していてね。ちょっと早いんだけど、ホールに戻ってもらえないかしら。」

「お断りしますわ。」

「えっ？」

予想外の回答に、メイド長は固まる。今まで一度も反論をしたことがない恵が、メイド長の提案を拒んだのだ。

「休憩は当然の権利。時間いっぱいまできっちり休憩を取らせていただきます。」

「・・・そこを何とかお願いできないかしら。」

「しつこいですわ。」

「そんなこと言わないで頂戴。お客様だけではなくて、他のメイドからのお願いでもあるの。」

「・・・しょうがないわね。」

「ごめんなさいね。色つけておくから。」

「皆も聞いたでしょう。休憩時間はお終い。2、3人私について来なさい。戦場に戻るわよ。」

「はい！お姉様！」

メイド達は徹底的に訓練された兵隊のように足並みを揃え、恵と共にホールに突撃していった。

「一体何があつたの・・・。」

メイド長は頭を抱えるしかなかった。

「一番テーブルにブレンドコーヒーとモンブラン。三番テーブルは

片付けをお願い。お客様がお帰りになってから
2分以上経ってるわよ！四番テーブル！お客様から注文した品が来
ないと苦情が来てるわ！七番テーブル！・・・」

いつもは皆テキパキを働いているからここまで忙しくならないのだ
が、どうにも今日に限って皆の動きが悪い。

どうも俺に見とれてしまつて作業効率が悪く落ちている様だ。稼ぎ時で
ある日曜日の、

しかもイベントの日でこれではもったいない。しかたない。一肌脱
ぎますか。

—— 店長Side ——

やっぱり、皆ケイ君に見とれているわね。予想通りといえば予想通
りなんだけど、作業効率まで落ちるのは
計算外だったわ・・・どうしたものかしら。

・・・ん？ケイ君が見当たらないわ。それに、2分おきにバイトの
子が入れ替わりで更衣室に・・・？

何をしているのかしら、気になるわね。・・・あら、この声はケイ
君かしら。

「あなたたち、少しタルンでいるんではなくて？自分で言うのもな
んだけど、私に見とれるのはかまわないけど、
それで仕事が疎かになるのはいただけないわね。」

「いえ、そんなことは・・・。」

「あるわ。仕事をしながら店員全員の様子を見ていたけれど、少な
からず全員の動きが悪くなっていたわ。」

「・・・申し訳ありません。」

「プロ意識を持ちなさい。いくら私達がバイトとはいえ、お客様からお金をもらっている以上プロなの。」

そして、私達は働かせてもらっている立場。そのことを忘れてはいけないわ。」

「・・・はい。」

・・・思いつきり凹んでいるわね。業務に差し支えが出なければいいのだけれど・・・。

「私というイレギュラーな存在のせいで、仕事に手がつきにくいのも事実。その点については私に非があるわ。」

ごめんなさい。」

「い、いえ！お姉様が謝る必要はありません！」

「ふふ、ありがとう。あなたは細かい気配りができる子なのだから、きつとできるわ。」

「いえ、私なんて・・・。」

「仕事が終わった後、皆への労い。誰も気がつかない花への水遣り、他の子がミスをした時にフォロー！」

数えればキリがないわ。ここまで気配りができるのだから、今の状況でもきつとあなたなら本来の力を発揮できるわ。」

私が保証する。だから、がんばって頂戴。」

「お姉様・・・。ありがとうございます！」

「期待してるわよ？」

「はいっ！」

「それじゃ、次の子を呼んで来て頂戴。」

「わかりました。少々お待ちください。」

お姉様から激励をもらった子は、意気揚々と職場という名の戦場へ突撃していった。

ケイ君……。こっちの方が似合っているわよ。それと、ありがとう。給料割り増ししておくわね。

ぬはーっ。やっとメイド全員の説教が終わった。さて、ホールに戻らなきゃ。

「ケイ君、ちょっと事務所に来てもらっていいかしら。」

「何かしら？忙しいから手短にして欲しいのだけど。」

ただでさえ30分近くホールを空けていたんだ。早く戻りたい。

「手短にできるかどうかは分からないけれど、真面目な話なの。ついてきて頂戴。」

・・・演技はやめるか。

「ん。」

「お茶を入れてくるから少し待っててね。」

「ん。」

さて、何の話だろう。やっぱさっきの説教の件についてだろうか。明らかに越権行為だったし……。減給くらいは覚悟しておくか。

「お待たせ。……何から話したらいいかしら。そうね、まずは他の従業員達への激励の件から話しましょう。」

「……ん？ 激励？ 俺は説教をしたんだが。」

「正直な所、ケイ君が女装をしてから、他の子が見とれるだろうとは予想してたの。でもね、それで作業効率が落ちるのはさすがに予想外だったわ。」

「ん。」

「店長ですら対処に困る問題を、あなたがあっという間に解決。しかも従業員達のモチベーションまで上げてくれた。」

このままじゃせっかくのイベントを継続できなくなる所だったわ。本当に、ありがとう。」

店長はふかぶかと頭を下げた。……予想の斜め上に行く展開だ、ついていけん。

「ん。」

「この件に関してはお終い。それじゃあ本題に入るわね。本当は閉店してから話そうと思ったのだけれど……。」

「だったら閉店してから言えや。はやくホールに戻りたいんじゃない。」

「でもね。私の気持ちが変わらない内にこの件はケイ君に聞いてもらいたかったの。」

「さいですか。」

「ん。」

「単刀直入に言うわ。神代恵君。あなた、この店で社員として働く気はない？」

「……なんで？」

「予想の斜め上の斜め上に行く展開だ、何を言われているのかよくわからない。」

「ケイ君がバイトとして採用されてから一年。このままバイトにしておくのはもったいないと思ってるね。」

「もし正社員になったら時給制から月給制に。賞与もあるし福利厚生もしっかりしているわ。もちろん、」

「指名料は基本給とは別に上乗せするわ。」

「いい事尽くめで怖い。何か裏がありそうだな……。」

「とりあえず正社員としての業務内容を聞いてみるだけ聞いてみよう。」

「……業務内容。」

「何時も通り、ホールに入ってくれば良いわ。あなたは稼ぎ頭の一人だし。あ、でも、日曜日だけはメイドの格好をしてもらえないかしら。まだ午後3時半過ぎだけれど、いつもの売り上げを既に抜いているのよ。ケイ君がメイドの格好をして接客してくれるだけで売り上げUPにつながるわ。」

「それだけ？」

「できれば、定休日にはやる気のある子を集めて、お嬢様の仕草や素振りを指導してあげて欲しいわ。」

「うおおい。それじゃ休みがないじゃないか。」

「・・・休みがない。」

「最低でも週に1日は休日を作る。もちろん、定休日の指導には、休日出勤手当ををつけることができるわ。」

それが狙いかこの狸。食えない人だ。・・・しかし、ボーナスや福利厚生があるのはでかいな。

手取りが一気に増えそう。ちょっと欲張ってみるか。いきなり手札を大量に切ったけど、余力があると考えるのがベターだ。

「もう一声。」

「・・・意外と欲張りなのね。」

「ん。交渉。」

「そうね……。それじゃあ、メイドの格好をしているときは、別途手当てを出すわ。これでどう？」

ふむ……。ここいらが落としどころか。

「服？」

「え？」

「何を着てくれば？」

「交渉成立ね。用意が出来次第スーツで来て頂戴。それまでは今まで通りでかまわないわ。」

「ん。」

「始業時間は午前9時。退社時間は……。閉店時間ね。」

「長い。」

「終業時間は18時よ。それ以降は残業扱いになるわ。」

「ん。」

「それじゃ、改めてよろしくね。」
なんか胸元から皮財布みたいなのを取り出した。その中から四角い紙が出てきた。……。名刺かな？」

どうやら店長はメイド喫茶を開店させた企業の課長さんらしい。新しいプロジェクトとして立ち上げた

フランチャイズ

FCがこのメイド喫茶。これまた、思い切ったことをするもんだ。
ちなみに、店長の名前は藤原岬。^{ふじわらみさき}みんな店長とかメイド長としか呼ばないから忘れてたよ。

「用件は以上よ。さ、ホールに戻って頂戴。」

さて、ちょっとからかってやるか。

「言われなくてもそのつもりよ。”岬お姉様？”」

「!？」

お、店長が驚いていら。おーおー顔赤くしちゃって。そんな年でもないだろうに。

「さっさと行きなさい！」

「ふふつ、分かりましたわ”岬お姉様”。」

「ふつ!!」

これ以上はやめておこう。なんか。色々と爆発しそうだ。」

——午後4時——

この店の傾向として、16～18時にトラブルが発生しやすい。そう、今回みたいに。

「お姉さん綺麗だねー。こっちに来て一緒に飲もうよ。」
風俗じゃねーそこは。

「ありがとうございます。指名は別途料金を頂きますが、よろしいでしょうか。」

「O K O K、早くこっちにおいで。」

「かしこまりました。」

ム力つく客にも笑顔を忘れず。サービス業のつらいところだ。なんて考えていたら、腰に手を回され引き寄せられた。そのまま背中を撫でてくる。きもちわりい。

「ほっそいねえ。」

「お止めください。このようなサービスは当店では行っておりません。」

「無表情でハッキリと断ってやる。しかしこの客、どうにも俺がそういうキャラを作っていると思ってるみたいだ。
まあ、半分正解なんだが。」

「まあまあ、そんな堅いこといわないでさあ。」

「これ以上この行為を続けになるのであれば、セクハラと見なしますか。」

「んだよ……。連れなないな。」

「他のお客様からご指名が入りましたので、これにて失礼させていただきます。ごゆっくりどうぞ。」

最上級の微笑と共に、他の席に移動してやった。これであの客も懲りるだろう。

なんて思っていたら20分くらいして、例の客が座っている席からメイドのものと思われる悲鳴が上がった。

あのやろう。全然懲りてねえ。他のメイドにおさわりをしたみたいだ。触られた子は涙目になっている。

改めて例の客を見ると、どうやら酔っ払っているらしい。この店に来る前に居酒屋にでも行っていたのだろう。

これは完全に俺のミスだな、あの時点で止めておけばよかった。

「ケイ君、お願い。」

「ん。」

さて、俺の出番か。

カツカツカツカツカツ

——例の男のテーブル——

「お客様。」

「ん？おおつ、さっきのお姉さんじゃないか。戻ってきてくれたのか。」

「あれ以上の行為はセクハラと見なすと警告したはずですが。」

「あんたには、だろう？他の子ならノーカンだ。」

最早言っている意味がわからない。支離滅裂だ。

「かしこまりました。それでは営業妨害と見なし、警察に通報させていただきます。」

警察という単語が出た瞬間、男は逆上して恵の胸倉を掴んできた。

「んだよ。それで脅してるつもりか？」

「脅してはございません。通報させていただきます。さ、行きなさい。」

恵が被害にあった子にそう告げると、涙目になっているメイドは足早に店の奥へと消えていった。

「！待てよおい！どけっ！この野郎！」

男は恵に殴りかかるが、いかんせん相手が悪い。恵は子供の頃から親に武術の英才教育を叩き込まれている。

それこそ、免許皆伝クラスの地獄というあの英才教育を。恵の性格がここまで歪んでしまった原因のひとつである。

恵はギリギリまで酔っ払いの拳をひきつけ、その腕を取り、捻り、地面に押さえつける。

「痛い痛い痛い！離せよ！」

「営業妨害に加え障害未遂も加わりましたね。離しませんわ。警察が来るまでこの体制を維持させていただきます。」

5分後、やっと警察がきた。全く、俺は用事棒かつての。

ちなみに。この一部始終を見ていた客は、男女問わず恵のファンになったとかならなかったとか。

1話 彼は執事長（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

いやはや、一話目から長すぎましたかねー。

・・・次話と投稿できるのはいつになるのやら。

では、また。

2話 彼は暴走族（前書き）

おはこんばんちわ！

どうもゆっきです

原作がないと、創作に幅が生まれますね。書いてみて驚きました。
2次創作はある程度プロットがあるから楽っちゃ楽なんですけど・・・
。

本文どぞー

2話 彼は暴走族

執事とメイド。時々暴走族

2話目

日曜日午後9時を回り、恵の女装イベントも終わりを告げた。イベントは大成功に終わり、帰り際に客たちは、次々に女装した恵についてレジのメイドに質問をしていた。あの子のシフトはどうなっているのだとか、あの子の趣味や好きなものはといった質問が大部分である。

そりゃ一般男子だったら綺麗な子を見つけたら仲良くなりたいたろう。う。

まあ、中身は男なんだが。

店長の計らいで、謎の美女の正体は明らかにされなかった。恵が女装している間、
ケイはみんなに恵と呼ばれることになり、女として働くことになったのである。

女として疑う余地のない外見に、普通の男だったら意気消沈のひとつでもしそうなもんだが、
そこは軽く性格が捻じ曲がっている恵のことである。心配はいらないだろう。

・・・本人も楽しんでたみたいだし。

閑話休題。

恵が帰り支度をしていた所、更衣室のロッカーから金属と樹脂が小刻みにぶつかり合う音が聞こえてきた。グーッグーッとそれは音を立て、早く応答せんかゴルアといわんばかりに振動を続けている。

恵はそれを手に取り、画面を確認するために振動をし続ける元をスライドさせた。

（・・・明からか。）

この時間に明から連絡があるのは珍しくない。問題は日曜日であるという点に尽きる。

明は地元では有名な暴走族の族長を勤めている。それもかなり大規模な。

恵が明のアパートに転がり込んで以来、ストレス解消をしるといわんばかりに恵にも暴走行為に参加しろとしつこく勧誘してくるのだ。

そしてその暴走行為は週に2度行われる。平日のいずれか一日と、日曜日である。

（——明日は寝不足かな。）

恵は一人ごちると、さっさと着替えを済ませて一人帰路に着いた。

「遅いわよ。ほら、さっさと準備して。」

「ん。」

家に着くと、そこには特攻服を身にまとい、スカーフを目だけ露出させるように

装着した明が待機していた。準備万端である。・・・手に持つてるチエーンは何すか。

「ん。・・・15分待つて。」

「なんでそんな・・・ああ、エクステ取らなきゃか。」

そうなんだよ。この髪膝くらいまであるから動きにくくてしょうがない。

「ん。」

俺が肯定の意を示すと、明は良い事思いついたーと言わんばかりに悪役が浮かべる様な

笑みをこちらに向けてきた。・・・明はどんな表情も似合うな。

「・・・恵、あんた今日はそのまま来なさい。面白いことになりそう。」

「ん。・・・え？」

「いいから。ほら、さっさと準備しなさいよ。」

「・・・ん。」

動きにくいつてのに。全く。

俺は漆黒のライダースーツのまま、木刀を片手に再び明と家を後にした。

ちなみに明のバイクも元はGSX-Rである。改造しすぎて原型留めてないけど。

—— 集会場 ——

「お疲れ様です総長！」

集会場に恵と明が到着するや否や、構成員が二人を迎え入れた。ちなみにこの暴走族、構成員の8割は何故か女性である。女尊男卑

っぽくなっている。

恵は、族の集まりの時にヘルメットをはずすことはない。顔が割れると色々と厄介だからである。

そのため、他の構成員からは性別不明の明の側近という扱いになっている。

恵という名前も、性別を判り難くしている要因のひとつだろう。

「恵さんもお疲れ様です！」

「ん。」

二人はバイクから降りると、集会場の奥まで歩いていき、建築資材を積み上げた

壇上に登る。明は恵から木刀を借りると、木刀を肩に掛けながら壇上に積んである資材に腰掛けた。

恵は明の斜め後ろに待機。この格好が二人のスタンダードである。

「今日は何人集まつてる？」

明が構成員に質問すると、尋ねられた構成員は即座に回答した。

「223人です。・・・前回より少ないですね。」

集まっている人数を聞いて、明は少し顔を顰めた。

暴走族とは、構成員の数〓強さといっても過言ではない。

傍から見れば相当な人数なのだが、明にとっては不満みたいた。と、その時。恵に向かって質問が飛んできた。

「あの、恵さん。」

「ん。」

「髪・・・どうしたんすか？」

どうしたと言われても……。と恵は内心焦る。彼が回答に困っているのを見て、

明が助け舟を出した。

「フルフェイスだからわからんが、中々いいだろう？結構気に入ってるんだこれ。」

明はまるで恵の髪をいじりながら、自分が褒められているかの様に機嫌よく感想を述べ始めた。

「だいたい、恵にはロングが似合うんだ。なのにこいつときたら全然伸ばそうとしないし・・・。」

まてまて、それじゃまるで俺が女みたいな言い回しじゃないか、と恵は内心講義するが、

いかんせん心の中だけの反論では伝わらない。

「恵さんの顔見たことないから何とも言えないっすけど・・・。」
キラリ。ここで明の目に悪戯小僧の光が浮かぶ。

「なあ、恵。」

「ん？」

恵の心の中で警鐘がガンガン鳴り始めた。この流れはまさか・・・。

「走る前だし、そろそろ顔見せてもいいんじゃないか？」

いやな予感とは、だいたい当たるものである。

・・・ああっ！そっぴや化粧落としてないじゃん！
今更ながら、この事実が気がついた恵は頭を抱えた。これじゃどこから見ても
胸がちよつと残念な女にしか見えない。

「・・・いい。」

「そんな事いわないで下さいよー。皆恵さんの顔みたがってるんですよ。知ってました？」

恵はどんどん逃げ道を塞がれていく。そろそろ袋小路だろうか。

「・・・でも。」

さらに逃げ道は塞がれる。

「いい加減諦めな恵。いい機会じゃん。あんた美人なんだからさ。」
明は後ろから恵の首に手を回し、ヘルメットを固定するためのベルトを解除した。

「総長が認めるほどの美人さんっすか！楽しみっす！」

男達の表情が期待一面に染め上げられた。もう女確定っすか。

「ここで顔見せてくれたら、朝もう少しだけ優しく起こしてあげるわよ（ボソッ）。」

正に、小悪魔。この提案は恵にとって非常に魅力的である。

「・・・。」

「沈黙は肯定と見なすよ。」

まあ、ここにいる奴等はメイド喫茶になんて来ないだろうし・・・

そんなことを恵が考えていると、スポッと音が出そうなくらい明は
一気に恵のヘルメットを奪い去った。

さらば俺の貞操（謎）

7
 •
 •
 •
 ○
 8

一同、無言である。それもそうだ、恵は明と並ぶくらい綺麗なのである。

そんな女顔の彼が、あまつさえ化粧をしているのだ。その綺麗さと
言ったら、

筆舌しがたいものがある。

「どうした皆。あまりの綺麗さに声もでないか？」

明がニヤニヤと俺の腰を腕に抱きながら構成員一同に話しかけている。

「うん」

うっ？

「うおおおっ！……！」

集会場に構成員の叫び声が轟く。

「もったいないですよ！なんで今まで隠してたんですか！」

「恵さんは彼氏とかいるんですか！いないんだったら付き合ってください！」

こうなるわけである。まあ、ある種予測できた事態ではある。ここで恵は、明に一矢報いてやろうと、自爆戦法に出た。

「・・・私は・・・明のものだから。」

「ちょ、総長と恵さんってそういう関係だったんスカ!？」

「なっ!？」

明の表情が困惑に染まる。そして、次第に赤くなっていた。今の格好を見てみようか。明が恵を腕に抱いている状態である。

「夜も・・・（長話で）寝かせてくれないし・・・朝も・・・（起こし方が）激しくて。」

そんな状態で恵は顔を朱に染めると、俯きながらそう呟いた。やはり恵には女優（？）の才能があるのではないか。

「ちょ、何言ってんだ恵!!!」

明は顔を真っ赤に染めると、恵に食ってかかった。しかし、これも恵の作戦の内である。

「明・・・今は人がいるから・・・。」

ニヤリ、恵は明にしか見えないようにほくそ笑む。明は「やられた!」という表情で

恵の胸倉を掴んだ。

「こ、この!」

正に、どツボにハマるとはこういう事を言うのだろうか、明が否定すれば、恵がやんわりと

「否定を否定」する。そして構成員は「そういう事実」があるものだと思い始めていた。

「ん。そろそろ時間。」

「え？あ”。」

族長としての彼女をよく知る人から見れば、有り得ない光景を目の当たりにし、構成員らは

心底驚いていた。と共にニヤニヤしていた。

「くっ・・・、何笑ってんだお前ら！さっさといくぞ！」

「」「」「お、応！！」「」「」

ぐだぐだである。

そんなこんなで、ぐだぐだのまま明達の暴走族「愚連隊」は、日曜日の真夜中に

街中へと繰り出していった。ああ、ちなみにこの「愚連隊」という名前は明が直々に

つけたものである。・・・なんていうか、こう、ネーミングセンスについては突っ込みを

入れたくなるが、我慢していただく。ここいらのオトシゴロの若者は、どうもそれっぽい

名前に憧れる様だ。

真夜中の交差点を、凄まじい数のバイクが爆音を立てて走っていく。

実に迷惑極まりない。

まあ、他人から見たら迷惑極まりない行為なのだが、愚連隊の若者達は、日常の不満を

こついった形でしか発散することのできない輩ばかりである。誰か俺に気づいてくれ。

俺達はこんな凄い事ができるんだ。そう、まるで誰かに知って欲しいかの様に。誰かに

自分達を認めて欲しいかの様に。

街中を走ること一時間、正面からバイクの集団がやってきた。どうやら別の町から他のグループ

が遠征にやってきた様だ。

爆音の中、恵と明はお互いに合図を交わし、コースを変え・・・ない。突っ切るらしい。

対する遠征グループは、まさかこのまま突っ込んでくるとは思ってなかったのだらう、

あわててハンドルを切り、道を明けていく。途中、相手側の何台かが巻き込まれて横転したみたいだ。

恐らく、コケにされて黙っている様な連中ではないだらう。きっと後を追ってくるに違いない。

愚連隊の皆はさっさと退却すると、川沿いの広場へ集合した。

相手のグループを真っ向から迎え撃つ体制らしい。

愚連隊は何時でも来いと言わんばかりに広場で待機していた。

2話 彼は暴走族（後書き）

お読みいただきありがとうございます

さすがに一話目が長すぎたので、これから少なめで投稿したいと思います。

では、また。

3話 彼は黒い風（前書き）

おはこんばんちわ！

どうもゆづきです

東方時操劇を更新することができたので久々にこちらにも投稿します

それでは、本文どうぞー

3話 彼は黒い風

愚連隊の皆が各々の獲物を確認する中、恵だけは皆から離れ、架橋の下で柔軟体操を念入りに行っていた。幼い頃より、地獄のような鍛錬を行ってきたため、体がそれに順応しているのである。そのためか、恵の体は新体操の選手レベルに柔かい。

恵の性別が判明（誤解とも言うが）してから30分程度しか経っていないのだが、構成員の半数以上が、柔軟体操をする恵に熱い視線を送っていた。架橋のぶつとい柱を前にした恵は、徐に柱に向かって足を振り上げた。そのまま踵落としてもするのかと思いきや、足が最高点に達したところで、柱に振り上げた足を押し付けた。そしてそのまま、ぐつ、ぐつ、と自分の体重をかけはじめた。なんとも斬新な柔軟体操である。足が180度以上開いてるのも、恵ならではの柔軟さであろう。それを見ていた構成員達は、これも柔軟体操なのかと驚嘆していた。そんな構成員をよそに、恵はコンセンションし続ける。今なら、飛んできた石ですらすぐに察知できるのであろう。

その時、恵を目掛けて拳大の石が飛んできた。ナイスコントロールと言わざるを得ないそれは、恵の頭目掛けて一直線に飛んでいく。まあ、あの後ヘルメットを装着しなおしたのだから、たいした怪我にはならないのだが・・・。

しかし、恵はそれを難なく後ろ回し蹴りで打ち落とした。空手家もびっくりである。少しでもタイミングを誤れば頭にゴスツと嫌な音が響いたかもしれない。

恵は辺りをキョロキョロと見回し、打ち落とした石を見つけると、徐にその石を拾い上げ、円盤投げの選手よろしくグングンと自転を始めた。十分な勢いがついたところでその石を投げ放つと、空気抵抗や重量を無視したかの様に、土手の上を目掛けて一直線に飛んで

いった。数秒後、土手の上から「あがつ！」という声と共に、一人の族が転げ落ちてきた。どうやら、綺麗に命中したらしい。その声を聞き、満足そうに頷いている恵を見て、明は苦笑していた。

そして、土手の上から大勢の人が降りてきた。どうやら、ガチンコ勝負に持ち込むつもりらしい。暗くて人数が良く分らない。まあ、それはあつちも同じことだが。さすがに多勢に無勢だ。恵は仲間の元へ戻っていった。

「お疲れ様です恵さん！後は私達にまかせて後ろに下がっててください！」

「ん。」

恵に労いの言葉をかけたのは愚連隊の一番槍、玉木成美。たまきなるみ恵や明程ではないが、武術、とりわけ空手に精通している。昔は愚連隊に敵対していたグループの幹部だったが、恵にボコボコにやられた。その際、恵の腕つぶしの強さに憧れ、恵の下についている。先の一件で恵が女だと皆思い込んだが、恵と手合わせをした彼女だけは、男女の銃身の違いから、本当は男なのでは。と思っている。ちなみに、恵に想いを寄せている人物の一人である。モゲロ。

閑話休題

「お前ら覚悟はできてんだろっなあ！」

女が多いと見るや否や、相手のグループは一気に強気になった。まあ、女といっても猛者ばかりだが。

「ノシた後輪してやるよ……ククッ。」

などと脅しをかけてくる。こちらが怯むのを狙っているんだろう。が、そんなもん愚連隊のメンバーには通用しない。

「ハッ！あんたらみたいな粗。ンじゃ満足できないね！後5cm大きくなったら相手してやるよ！」

・・・女は強いなあ。全然怯んでないぞ？

自分の体の一部を蔑まれ、相手グループはさすがに我慢が出来なかったようだ。車のエンジンに二トロをぶち込むが如く、一気に一触即発までボルテージがヒートアップしていく。

「んだとお・・・。お前ら、遠慮はいらないぞ。ヤれ！」

「おおおおおおおっ！！！」

こうして、プレイ人数総勢300名を超す深夜の大乱闘ス。ツシユブラザーズは開戦した。

愚連隊は、単なるヤンキーの集まりではない。構成員の誰もが、何かしら武術を齧っている。そして、戦術の立て方などを幹部がグループ単位で教えている。・・・軍隊？

敵の数がこちらより少ないとみるや、愚連隊は二人一組になり、着実に相手の数を減らしていく。ただ暴れるわけではない。さすが、伊達に恵や明が連日連夜戦術を組んだわけではない。それこそ、現代社会における少数グループによる鎮圧、戦国時代の戦争の陣形ま

で練りこんであつた。ここまで本気になるからこそ、愚連隊はここまで大きくなれた訳である。用いる武器にしたって、見た目で相手を威嚇するナイフや警棒などではなく、リーチの長い角材や耐久性に優れる金属バットなどを好んで用いていた。物干し竿まで用いる構成員もいるくらいだ。槍の重要性をよく分かっている証拠である。当然、相手は近づくこともできず鳩尾や首などを突かれていく。なんとか物干し竿の射程内に入れたとしても、ツーマンセルの片割れが、耐久性を重視した金属バットで容赦ない打撃を与えてくる。これだけ言えばわかるだろう。相手は既に負け戦である。人数差もあったが、圧倒的ともいえる戦略、隊員同士の連携、個々のポテンシャルの高さもあり、愚連隊はほぼ無傷で相手を制圧した。

あつという間に、相手は族長だけになった。一番後ろで見ていただけだったため、被害がなかったのだろう。しかし、今回はそれが仇となった。愚連隊と当たる前まで負け知らずだったのかもしれないが、どうにも今回は相手が悪かった。族長は一人でさっさと逃げようと自分のバイクが置いてある土手の上まで逃げようと走り出したが、愚連隊は200人を超す大所帯である。逃げ道などとうに塞いでいる。こうして、あつという間に族長は囲まれた。ジリ、ジリ、と族長を囲む愚連隊の円陣が小さくなっていった。そして、半径10mになった当たりで、族長が恐怖のあまり笑い出した。壊れたかと皆が円陣を解散させようとしたその時、族長はなにやらポケットを漁り始めた。ナイフでも出すのか、と思つたらなんと出てきたのは、黒光りするリボルバー式の拳銃だった。恐らく、巡回中の警察官からでも奪つたのだろう。相手が持っている物が拳銃だと分かった途端、愚連隊の陣形が乱れ始めた。さすがに拳銃が出てきたとなると、怪我では済まない。最悪死につながる。

だが、誰か撃たれたら一気に皆襲い掛かるだろう。リボルバー式の拳銃は最大で弾数は6。

次に標的を定める前に、背後から一気に襲い掛かり、次の日には族

長は病院の集中治療室で寝たきり生活をしばらく送るハメになるだろう。だが、さすがに一番槍の成美も攻めあぐねていた。拳銃の対処方については予め明と恵から教わっていたが、怖いのである。銃社会ではない日本で、一般人が拳銃を見ることがなど無いに等しい。他の構成員同様、ジリジリと後退せざるを得なかった。

そんな中、戦場に一迅の黒い風が巻き起こった。恵である。恵は相手の獲物が拳銃だと分かった瞬間、観戦を止め族長目指して走り出したのである。

さすがにこれには明は焦った。いくらヘルメットを装着しているとはいえ、当たり所が悪かったら即死である。恵の動きに族長が気づいたのは、恵が円陣に突撃した辺りだ。円陣の一角が、まるでモーゼのように割れたからである。恵の行動に、族長はパニックを起こした。今まで拳銃をチラつかせれば大抵の相手は逃げ出したのだが、恵は間逆の対応を取っている。このままだとタコ殴りにされ、その後にはリンチが待っているだろう。何が何だか分からなくなり、笑いながら激鉄を起こし恵に狙いを定めて、乱暴に引き金を引いた。

パン！ と乾いた音が深夜の川沿いの広場に響き渡った。その音を聞いた瞬間、構成員の何割かは目を背けたが、恵を信じている幹部クラスの人間は目を逸らすことなく、恵の一挙手一投足をその目に焼き付けていた。ちなみに、その幹部というのは恵と成美のサシを間近で見ていた人物である。

——あの人の動きは勉強になる——

ただその一心だった。

瞬間、ヘルメットのバイザーが粉々に砕け散った。幸い掠っただけのようだが、それでも、漆黒のライダースーツを纏った死神の突撃を止めるにはいささか役不足だった様だ。黒い風は止まることなく吸い込まれるかの様に族長の胸元に近づくが、既に銃口はこちらに向いていた。しかし、2発目の銃声が響くことは適わなかった。その前に恵が拳銃のシリンダー部分をつかんでいたからだ。拳銃に詳しくないと何故このような現象が起きたかはわからないだろう。リボルバー式拳銃という物は、引き金とシリンダーが連動している。そこに激鉄の動きが加わる。引き金を引く↓激鉄が起こる↓シリンダーが回る↓激鉄が元に戻り弾の火薬部分を叩く という動作を行わないと弾は発射されない。恵はこのシリンダーが回る、という部分を物理的に手で止めたのだ。当然引き金も動かない。このことを知らない族長は何が起こったのか分からないといった表情でひたすら引き金を引き続けていた。相手に殺す意思があると判断した恵は、問答無用で銃の方向を外側に180度捻った。それと同時に響き渡る相手の悲鳴。引き金にかかったままの人差し指があらぬ方向を向いていた。

しかし、恵は追撃を止めない。相手が悲鳴を上げながら人差し指を抑えている間に、相手の頭を抱え込み、無防備な鳩尾に容赦ない膝蹴りを叩き込む。体重の乗ったその威力は筆舌しがたい。その証拠に、相手は見るも無残に崩れ落ち、公園に吐しゃ物を撒き散らせている。流れるような動作で体を一回転。そのまま勢いをつけて続けて腹をサッカーボールキックで貫く。

この一撃で全てが決した。族長は白目を向き、泡を吐いている。もう動かないだろう。もう、なんていうか、完全にワンサイドゲーム

だった。これが、あの全てを魅了する妖艶な顔の持ち主が起こした行動の結果だとは、皆信じられなかった。

バイザーが壊れてしまったため、もうヘルメットで顔を隠す意味がないと判断した恵は、ヘルメットを外した。数本の街灯しかない闇に近い世界で風にそよぐ銀色の髪は、戦女神が戦場に舞い降りたが如く、静寂の中、ただ、風に逆らうことなく揺られていた。

「お疲れ様です恵さん。」

「ん。」

愚連隊の皆がその姿に見惚れる中、成美が恵に駆け寄っていた。皆が畏怖の視線を送る中、彼女だけは純粹に恵の心配をしていた。彼女からすれば、誰が死んでもおかしくない状況を、自らの危険を顧みずに打破した恵を。何故労ってやらないのかと不思議に思っていた。

「お怪我はありませんか？」

心配そうにバイザーがあつたであろう付近を覗き込んでくる。それもそうだろう、バイザーが砕けたということは、弾が顔を掠めたということだ。いくらヘルメットがあつたからとはいえ、無傷であるとは思っていなかった。だが、そんな心配は恵の次の一言で吹っ飛ぶこととなる。

「ん。避けたから大丈夫。」

ピシッ！ 皆が固まった。恵は弾を避けたと言ったのだ。前々から恵のずば抜けた身体能力と反射神経は皆知っていたが、さすがにここまでくると人外レベルである。もう、乾いた笑いしか浮かんでいない。・・・人間か？

「・・・まあ、なんだ、その・・・帰ろうか。」

明の締まらない一言で、本日の活動はこれにて終了となり、解散した。

皆がバイクの元へ戻る中、恵はバイクにしまっていたスポーツドリンクを飲んでいた。

（あー疲れた。）

火照った体を夜風で冷ましていると、誰かに呼び止められた。

「恵さん。」

成美だ。何か用だろうか？

「ん。」

まだ、先の一件が心配なのだろうか。

「もしよかったら・・・連絡先を聞いてもいいですか？」

「ん。」

なんだそんなことか。と、恵はポケットからこれまた真っ黒な携帯電話を取り出し、成美に向かって放り投げた。しかし、これが失敗だった。成美が携帯を受け取った瞬間。まるで花嫁が投げたブーケに群がるが如く、近くにいた5〜6人の構成員が群がっていた。しかも全員女。彼女らは次々に恵の電話番号とアドレスを登録していた。それをみて、明はつまらなそうに呟いていた。

「恵がどんな他の女に……。」

それを聞いた恵は、ニヤリとほくそ笑みながら明に話しかけた。

「大丈夫……。私は……明のものだから。」

「！」

明の鉄拳が、恵の柔らかな髪を圧縮した。

3話 彼は黒い風（後書き）

お読みいただきありがとうございます

一応、こちらは書き溜めがありますので時間が取れ次第ポチポチと更新していきます

では、また。

4話 彼は寝起きが……（前書き）

やまやの弟の執筆の合間に、長らく放置していた此方を更新しよう
と思います。

……見ている人いるんだろうか

4話 彼は寝起きが……

「恵、ほら、起きて恵」

相変わらず恵は寝起きが凄く悪い。何回揺さぶっても起きる気配が無い。終いには明に背を向けるだけだ。

何時もなら此処で彼女お得意のヤクザキックが恵の背中に炸裂するのだが、先日 of 集会で優しく起こすと約束した手前、それをする訳にも行かない。明は約束はしっかりと守るタイプだ。

しばらく考えた後、明の頭上で豆電球が灯った。どうやら、名案が浮かんだらしい。

いそいそとパジャマを脱ぎ捨て、ハンガーに掛けてある恵のYシャツに袖を通した。無論、後は下着しか付けていない。

そしてそのまま恵が寝ているベッドの中へもぞもぞと侵入。彼の背中に張り付いた。足を恵の体に絡めるのも忘れていない。

これで準備は全て整った。後は声を掛けるだけだ。

「ねえ……起きて、恵」

耳元で優しく囁く。体制の関係上、この時足を恵の体から離してしまったのが、明の失敗だろう。いや、そもそもこの作戦自体が問題だらけなのかもしれない。

恵に反応があったが、まだまだ寝ぼけている様子。んゝ……と声

を上げた後、寝返りをうつた。明の方へ。

当然、二人の顔は急接近する。

経験上、恵は声や揺さぶりとは反対の方へ逃げる傾向があったため、このような作戦を取ったのだが、今回は裏目に出ってしまった様だ。

明は吃驚して声を上げかけた、ギリギリ持ち答えた。

さて、此処で問題だ。

Q・心地よいまどろみの中、近くに丁度抱きやすいすべすべぶにぶに物体があつたらどうなる？

A・抱きつく。

当然の様に、恵はがばちよと明に抱きついてきた。布団に入る際にめくれてしまったYシャツその下には乙女の柔肌が在る。

恵は抱きつきながらすべすべすべすと、その感触を楽しむのであつた。

一方、明の思考は混乱の極みに陥っていた。

（ちょ、やだ、こいつこんなに積極的だったわけ！？）

それもそうだろう。半裸の自分を恵が抱きしめ、更には背中を撫でられているのだ。混乱しない方がおかしい。

だが、混乱と同時に、少しだけ嬉しくも思っていた。

普段は本当に男か？ 思うほど恵は淡泊なのだ。

明が脱衣所に忘れ物を取りに行った際、運悪く全裸の恵とばったり出くわしてしまった時も、彼は何事も無かったかのようにカラダをバスタオルで拭き、髪を乾かした後そのまま出て行った事があった。

逆のパターンもあった。その時は、恵が忘れ物を脱衣所に取りに来たのだが、その時明は下着姿だった。彼女は慌ててバスタオルで体を隠したが、恵は彼女の肢体に目もくれずにお目当ての物を探し始め、目的を果たすとそのまま出て行った事もある。

彼を憎からず思っている明は、自分に興味が無いものだとは半ば諦めていた。しかし今はどうだ。寝ぼけているという事は、少なくとも本能に忠実に行動することが多い。

恵は本能では、女の体に少しではあるが欲情するかもしれない。何か固い物が明の太ももに当たっていることだし。

（……何だ、こいつも人並みとは言えないけど性欲あるじゃない）

などと冷静に考える事が出来たのも、普段とは違う恵の一面を垣間

見る事が出来たからかもしれない。

（でもこの触り方……んっ）

何と言うか、絶妙なタッチなのだ。心なしか明の体が熱く鳴り始めたのも、触っているのが恵だから、と言う事実が彼女の気持ちを高ぶらせているのかもしれない。

が、次第に恵の手が下に降りてきた。そろそろ、明の最後の砦であるショーツに手が当たりそうだ。

これはまずいと明は逃げ出そうとしたのだが、退路は断たれた。恵の足が絡んで来たのである。

このままではお尻を撫でられてしまう……。なんかそれも悪くないかなあとか考えていた明であったが、不意に壁に掛けてある時計に目が止まった。

遅刻ギリギリである。

その事実を知った明は、今までのほんわかとした空気を一瞬でぶち壊した。恵の腹に零距离からパンチを叩き込み、彼が訳も分からず悶絶している内に急いで自分の部屋に戻り、朝食を取ることもなくマッハで着替えを済ませて、化粧を始めた。恵の部屋で。

「恵！ 早く起きて！ 寝坊したから学校までバイクで送って！」

腹を押さえてベッドでのたうち回っていた恵であったが、「寝坊」という言葉に鋭く反応し、腹の痛みなど何処かへ吹き飛ばしてしまったかの様にベッドから飛び起きてライダースーツへと着替え始め

た。

「ごめん、急いで！　H Rまで後15分しかないわ！」

と、恵の方を見やると既に彼はいなかった。変わりに外からドンドン！　とエンジンをふかす音が聞こえてきた。どうやら窓から飛び降りたらしい。

（相変わらず仕事が早いわね……！）

明は急いで玄関に向かい、踵をつぶしてしまったローファーを気にすることなく恵の元へとダッシュした。

（そういえば、恵の髪昨日のままだったわね……）

明は恵の後ろに飛び乗ると、それを確認した恵はフルスロットルで発進するのであった。

余談だが、フルフェイスのヘルメットから流れる銀髪が風にたなびき、明に纏わりついてうざったい事この上なかったそうなの。

H Rまで後3分という所で恵達は校門前に到着した。幸い殆ど人影は無かった為、これ幸いにと、明はスカートの裾が跳ねるのみに留めずに全力で掛けて行く。

そして残り1分。教室の前で髪を治し、息を整えてから教室の中へと入って行った。

「おはようございます」

「おお、野崎か。ギリギリセーフだが何かあったのか？ お前にしちゃ珍しい」

担任の教師は出席簿に何やら書きこむと、そのまま教室へと視線を戻した。

「その……目覚ましが壊れました」

その瞬間、クラスメイト達から苦笑が漏れた。あるあるーとか、俺の目覚ましは3代目だ！とか色々言われているが、結果的に間に合ったので彼らに苦笑で返事をすると、自分の席に着こうとしたのだが――

「まあ、遅刻しない様に努力するのは良い事だが、彼氏にバイクで送って貰うのはいただけんなあ」

「なっ……！」

瞬間、教室が凍りついた。

学校では猫を被っている明。容姿とその性格から、彼女を狙っている男共はとても多かったのだ。

明は慌てて誤魔化そうとするが、時すでに遅し。

「なにいいいいいい！？」 野崎さんに彼氏がいるだとおおおお
おおお！？」

「終わった……俺の青春終わった……」

「だよなあ……やっぱ彼氏いたかあ……」

「ねえねえ明！ 今度彼氏紹介してよ！」

明は額を押さえて俯いてしまった。

（どうしてこうなった……）

ぬあー……眠い。んでもってすげー腹が痛い。痔になってるぞこれ。
何が有ったんだ？

俺は今遅い朝飯を公園のベンチに座りながら食っている。財布持ってきて良かった……あーあんパンうめー。

たまにはこういうメシも悪くないな。井戸端会議してるオバサンがこっち見ながら何か話してるけど、気にしたら負けな気がする。うん、気にしたら負けだ。

それにしてもあいつが寝坊するなんて珍しいな。昨日そんなに疲れ
たっけ……？ あいつ後ろで見てただけじゃん。

しかしこのあんばんうめーな。コンビニの菓子パンとは思えないわ。

また買いにいじ。

さてと……飯も食い終わった事だし、適当にその辺走り回ってから家に帰るかね。今日はバイト休みだし、ゆっくりできるな。

ブーツ　ブーツ

ん？　こんな時間に電話？

携帯を開くと、未読メール1件と表示されてる。From明……買い出しか？　なんか切らしてたっけ。

なにになに……？　ごめん、あんたの写メ見られちゃった？

……なにiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！！！！……？？？？

俺は夕方までバイクであっちフラフラこっちフラフラし、そのまま帰宅した。

一度頭を冷やそうとシャワーを浴びているのだが、俺の心の内はと言つと……

（OK落ちつけ落ちつけば落ちつく時落ちつくこつ。多分写メっていうのはエクステ付けて化粧した時の奴だろう。あれなら俺の素顔がバレると思えない。……いや万が一と言つ事がある。明にや悪い

が消去してもらおう。……さてよ？ あん写メ撮ってたの明だけじゃなかった様な気がする。そいつのデータも消去して貰わないとまずいな。とりあえず明が帰ってきたら拳骨の一発でもくれてやろう）
この有り様だ。顔が割れるのはまずい。できれば穏便に事を済ませたいんだけどなあ……。

シャワーを終え、髪を乾かそうと思ったのだが、どうにも喉が渴いて仕方が無かった為、その前に何か飲もうと腰にバスタオルを巻いただけの状態でリビングへと歩を進めた。ドアを開けようとしたのだが、なにやらテレビの音が漏れている。

（ああ、明が返ってきたのか。よし、なんか飲んだら、一発拳骨を落としてやろう）

何時もの事なので気にせずドアを開けた時、そこには顔を真っ赤にしながら恵を見て硬直する成美と、あちゃーと額に手を当てている明がいた。

まあ、気にすることもなかんべ、とそのまま冷蔵庫のドアを開けて飲み物を漁っていたら、恵目がけて一直線にテレビのリモコンが飛んできた。

「さっさと服着なさいよ！」

「ん」

リモコンと一緒に明の罵声が飛んできた。甘い！ こんなもんで俺が被弾するか！

俺は一応頷いたが、着替えに戻らないでお目当てのポ。リを探し出してそのまま喉を潤す。ああ、旨い。

「まったく、あいつは……」

「あうあうあうあう……」

顔を真っ赤にして俯く成美を尻目に、明は少しだけ顔を赤くしながら、ばつが悪そうにこつちを睨んでいた。ふん、知るか。

明は普段から見慣れている（というのもどうかと思うが）が、たしか成美は男兄弟が居なかったな……。さすがに刺激が強かったか？ 成美が俺に少なからず好意を寄せているのは知っている。……以外と初心なんだな。

「タイミング悪過ぎよ……」

「あうあうあうあう……」

「やはり恵さんは男だったんですね」

「そうよ」

どうやら成美は俺の化粧した姿を見ても女とは思えなかったらしい。どこかスッキリした様子。心なしか表情が和らいでいる。

「よかった……」

「何が？」

「いえ、こつちの話です」

まあそうだろうな。思いを寄せている存在が女だったら、そりゃシヨックだろうに。

「それにしても……綺麗ですな恵さん」

男に対して綺麗、か。そりゃ褒め言葉じゃないね成美さんよ。そこはカッコいいって言う所だろ。

「成美、男が綺麗って言われても嬉しく無いわよ」

「いやでも、本当に綺麗なので……」

ちなみに俺は今タンクトップにジーパンという、なんともラフな格好をしている。風呂上がりにはこれが一番だ。

「そりゃ私から見ても綺麗だとは思っけど」

おい。

4話 彼は寝起きが……（後書き）

——痛い！ いきなりなにするのよ恵

——……もう一発いっとく？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6045p/>

執事とメイド。時々暴走族

2011年9月9日01時21分発行